

三浦雄一郎 富士山から見るインクルーシブ野外活動の実情

三 浦 豪 太 ((株)ミウラ・ドルフィンズ)

2023年8月31日、父、三浦雄一郎とそのゆかりのある40名、そして父が校長をしている、クラーク高等学校登山部30名は富士山の山頂に立った。

この日から遡ること3年前、父は頸髄硬膜外血腫という難病にかかった。これは頸髄に突然血液が流れ込みその血腫によって脊椎の神経を圧迫、体全体に麻痺や痺れが伴う。緊急手術を受けたが少なからずの症状が残った。つまりこの日を境に、世界の山々をスキーで滑り降りた冒険家三浦雄一郎が介護度4の障がい者になったのだ。

それでも父は自分自身を諦めなかった。東京五輪聖火ランナーとして聖火を富士山でつなげる、札幌手稲山を登る、大雪山を滑る。週6日間のリハビリを行い、その時の回復の度合いによって目標を作ってきた。そして今回の富士山である。

この新しい父の冒険は、これまで父がエベレストを登る時、山岳的なバックアップ体制を作ったように、サポートする私自身にも新たな技術を学ぶ必要があった。それが障がいの有無に関わらず野外活動と一緒にいるための山岳用車椅子(HIPPO Campe)を扱うIOI(インクルーシブ野外活動指導員)取得と、こうした機材の併用である。

インクルーシブ野外活動に関わるきっかけ

私自身がこうしたインクルーシブ野外活動を行うきっかけになったのは二つの出来事が深く関係している。

一つ目は中岡亜希さんとの出会いだ。中岡亜希さんは「遠位型ミオパチー」という手の指や足先といっ

た末端の筋力から衰える進行性の希少難病を患っている。日本航空国際線キャビンアテンダントあったが、病気のために退社した。その後彼女は京都市内の塾の講師をはじめていた。その児童ら「一緒に山の登ろうよ」と誘われ、それが最終的に富士山登山にまで発展した。2008年私はそのサポートとしてのリクエストがあった。

その年の登山は天候の条件が揃わなかったため登ることは叶わなかったが、翌年09年、中岡さん自身が海外に行きフランス製の野外適応機材・登山用車椅子HIPPO・CAMPE(以下ヒッポ)を見つけた。三輪で通常の車椅子よりも長く軽力かつ頑丈に作られているヒッポにロープをくくりつけ、複数の人がロープにつながり負担を分散しながら、彼女の教え子、そしてミウラ・ドルフィンズのスタッフと共に富士山山頂まで登った。



写真①中岡亜希氏と2010年に富士山に登った時の記念撮影

もう一つは元慶應ラグビー部、杉田秀之さんからのおなじく富士山登山の依頼だ。彼は大学のラグ

ビー部合宿の練習中、スクラムが崩れ頸椎損傷という重傷を負ってしまった。この年は以前から慶應ラグビー部の最終仕上げとして富士山に登る予定であり、私がその隊を率いるはずであったが、こうした事故の後であり中止となってしまった。それから10年後の2018年、彼は当時のコーチと共にミウラ・ドルフィンズを訪ねてきた。彼は同期、先輩や後輩達とその時の約束の登山、富士山に登りたいと相談があった。当初は歩くことも難しいとされていたが、リハビリの成果でこの時までに麻痺が残りつつも奇跡的に自立歩行ができるようになっていた。希望は自分の足で山頂まで行く計画を立てた、しかしやはりバックアップとしてヒッポを使う事にした。そして2019年8月、彼のサポートと応援に駆けつけた総勢130名のラグーマン達と一緒に富士山の山頂に立ち10年来の約束を果たした。

山を登る方法はたくさんある。一人で自分の限界を挑むアルパインスタイルの登山、パートナーと組んで戦略を立てながら難しい山に登る登山、そして三浦雄一郎が70歳、75歳、80歳という高齢でありながら挑むエベレスト。そのためには多くの人たちに支えられて長い時間と努力を重ねて山頂を目指す遠征登山。どれも山頂に着いた時には登山特有の高揚感と達成感がある。特にそれを支えてくれた人と喜

びを分かちあう時それは何倍にもなるようだった。

中岡さん、杉田さんの登山はこうした登山の歴史に新しい1ページを付け加えたといっても過言ではない。中心には障がいがありながらもその山に登るという確固たる信念を持ったリーダーがいて、チームを作りみんな一丸となって山頂を目指すのだ。私は登山においては究極的には登山者の技術や体力ではなくそこに行くという意志の表現だと思っている。そういった意味ではこうしたヒッポを使ってチームを作り、中心には登山そのものの魂とも言えるリーダーがいるこの方法は新たな本当の意味でのインクルーシブな登山と言えるのではないか。

こうしたインクルーシブ野外活動が発展してきている。特に近年、信州大学では、長野県と連携した「インクルーシブ野外活動指導員養成講座」を開講し、インクルーシブの野外適応機材の扱い方、安全について指導をしている。私自身も2020年から信州大学にて、インクルーシブ野外活動指導員を目指して講座を受講し、IOI（インクルーシブ野外活動指導員）という資格を得た（資格の認定は、一般社団法人インクルーシブ野外教育研究所）。今回の投稿には今後、ますます多様化していく野外活動の中でインクルーシブな野外活動とその意味について話してみたい。



写真②2019年 杉田氏と富士山に登った様子

インクルーシブ野外活動のニーズ

三浦雄一郎氏、中岡亜希氏、杉田秀之氏、障がいがあっても諦めず野外活動を追求する彼らは特殊なケースなのだろうか？

ここに長野県と信州大学が同で実施した長野県の障害者手帳保持者を対象に彼らが持つ野外活動に対する意識調査のアンケートがある。（引用①）

最初の質問は「自然の中で四季を通してスポーツや余暇を楽しみたいと思いますか？」（図1参照）と

2. 登山界の現状と課題

いう問いである。これに対して60.8%が「はい」と答え、23.4%が「いいえ」、「わからない」が15.8%だった。次の問いは「可能であれば、自然の中で。健常者と同じようなスポーツや余暇を楽しみたいと思いますか」（図2参照）に対して「はい」が62.3%、「いいえ」が37.9%だった。

『誰と楽しみたいですか？』（図3参照）楽しみたいですか？家族（61.4%）、障がいのない友人（31.3%）、障がいのある友人（25.3%）、ひとり（19.3%）、その他（8.9%）という結果

「サポートがあればバリアフリーでなくとも構わない」（図4参照）はい（66.1%）、いいえ（33.9%）

「どのような事を問題と捉えている」（図5参照）障がいがある事で難しいと感じている（51.4%）、楽しみたいがどうすればいいのかわからない（21.5%）、自然に興味がない（12.4%）、情報がない（10.7%）、バリアフリーではない（4.5%）、その他（12.4%）

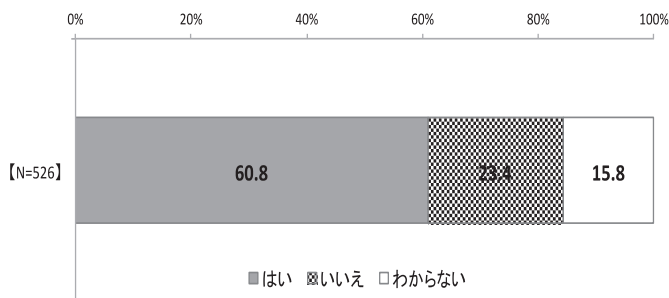


図1 自然の中で四季を通してスポーツや余暇を楽しみたいとおもいますか？（回答数526人：はい60.8%）

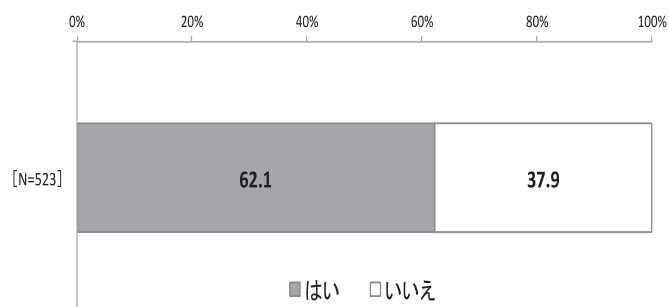


図2 可能であれば自然の中で、健常者と同じようなスポーツや余暇を楽しみたいと思いますか？（回答数523人：はい62.1%）

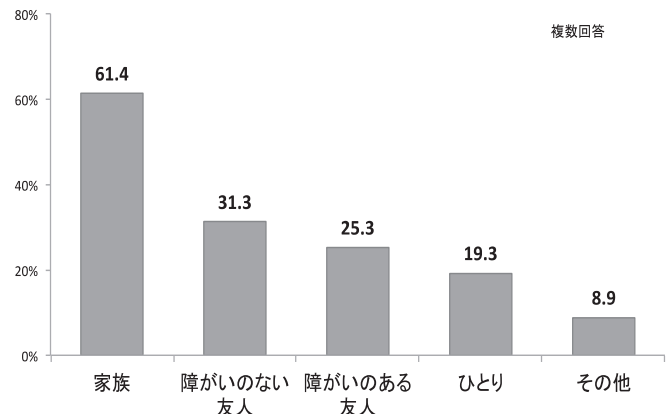


図3 誰と楽しみたいですか？
図1の設問で「はい（楽しみたい）」と回答した人を対象に質問

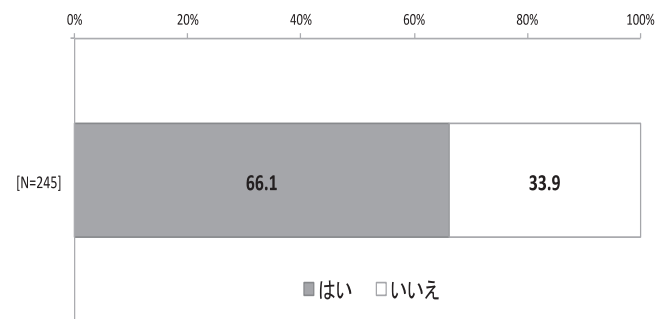


図4 サポートがあればバリアフリーでなくとも構いませんか？
図1の設問で「はい（楽しみたい）」と回答した人を対象に質問

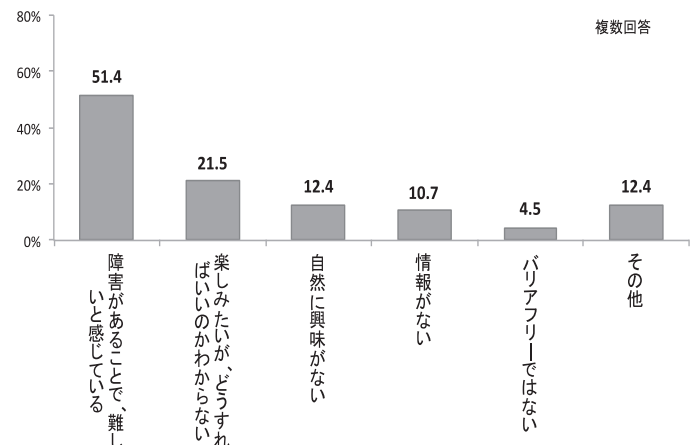


図5 どのようなことを問題と捉えている？
楽しみたいくない、またはわからないと回答した理由はどのような理由ですか？図1の設問で「いいえ（楽しみたいくない）」「わからない」と回答した人を対象に質問

障害者差別解消法とバリア（障壁）

これらの結果を踏まえると、多くの障がいを持つ人が野外活動自体には大きな興味を持っていることがわかる。しかし、それに対して多くのバリア（障

壁)があることを障がい者は感じ取っていることも読み取れる。

平成25年6月に制定された障害差別解消法が制定された。これは障がいを理由とする差別の解消に向け国の行政機関、地方公共団体等、および民間事業者が障がいを理由とする差別を解消するための措置を定めた法律である。(引用②)

この障害者差別解消法が制定されるのにあたり、現在社会には4つのバリアがあると言われている。

- 1) 物理的バリア
- 2) 制度的なバリア
- 3) 文化的・情報面でのバリア
- 4) 意識上のバリア

(引用③)

野外活動における物理・制度・文化情報面でのバリアとその克服

これをインクルーシブ野外活動とアンケートの実情を踏まえて考えてみたい。バリアフリーは国の施設、商業施設、交通機関、観光施設などが車椅子でもアクセスできたり、点字が記されている物理的環境が障がい者に配慮されている。

しかし、野外活動は多くの場合、大前提として「バリアフリー化」された環境ではない。登山において山道は自然のままの自然道を意味する。そこには木の根、石の段差、階段など通常の車椅子では難しい環境である。そのため学校のある教室に障がいのある子どもがいた場合山での遠足、スキー学習、バリアフリー化がされていない観光地が選ばれなかったり、こうした場所に行ったとしても障がい児童は別のプログラムが行われることで対応してきた。

インクルーシブ野外活動指導員とは、インクルーシブな野外活動に関する専門的な知識と、それに必要となる専門機材を高度な技術と知識で運用する技

能持ち、包摂的な教育的指導ができる専門人材のこ
という(小泉ら、2017、引用④)

その取得にはインクルーシブ野外教育に関する知識を学び、アウトドア用車椅子(Hippo Campe)の山岳・水上での安全な運用、スノーカート、チェアスキー、デュアルスキーといった雪上の野外適応機材の安全な運用など3級～上級の資格を習得する。

これらのニーズは増加傾向にある障がい児童によってますます重要な視点になってくるだろう。文部科学省の「令和4年度特別支援教育に関する調査結果について」によると平成2小学校・特別支援学校に該当する生徒は平成21年に9,035人であったの対して令和4年度には13,035人(44.3%↑)であった。しかし、これはあくまで特別支援学校に該当された人数で、実際に調査の対象になった人数は平成12年の37,380人から74,148人(98.3%↑)に増加している。(引用⑤)

こうした中1994年UNESCOがスペイン、サラマンカにて採択されたサラマンカ宣言(特別な教育ニーズを持つ児童に対し通常の教育システム内での教育を提供する必要性と緊急性が認識され、特別なニーズ教育に関する行動の枠組みを宣言)(引用⑥)に依じて日本では障害者権利条約を批准して改定された学習指導要領、第4、2項1)では障がいのある児童の生徒への指導が盛り込まれている。(引用⑦)その中で野外活動は「生命の有限性や自然の大切さ、挑戦や他者との協働の重要性を実感する」活動として広く学習指導要綱に盛り込まれている。

もちろん野外活動においてバリアフリーにするというのは一つの方法ではあるがコンクリートで固めたり、スロープを作ることが多くの景観や自然の良さが損なわれる恐れがある。そもそも自然体験はバリアフリーではないことを前提にこうした野外適応

2. 登山界の現状と課題

機材や人の手、工夫を加えることによって多くの物理的バリアを克服することができるのではないと思う。

またこうした選択技がまだ広く知られていないというのも障がいがある人にとって活動の幅を狭める大きな要因となっている。今回三浦雄一郎が富士山に登った意義はこうした選択技があるということをして社会に知らせる大きなきっかけになったのではないかな。

意識上のバリア（障壁）

今回、三浦雄一郎が富士山にヒッポを使って登った際、「車椅子で登って本当に登山と言えるのか」、「引っ張ってもらって周りの迷惑ではないのか」、「自分の足で登らなければ登山と言えるのか」、これまで先駆的な冒険を行ってきた父が車椅子を使って富士山に登ることに対して多くの批判があった。

「意識上のバリア」は障がいがある人に対して、無知や無関心、偏見や差別のことを指す。三浦は登山家で登山においての批判はあって然るべきであるが、いくつかの批判は私達社会が根幹に持っている意識上のバリアとも言える。それは「障がいがある人は人に迷惑をかけてまで何かをするものではない」ということだ。

日本では障がい者は福祉の対象だ。当然そこには福祉を受けるものと福祉に奉仕するものという図式が出来上がり、潜在的に障がい者は支援をしなければいけない「可哀想な人」とラベリングされる風潮があるように感じる。

しかし、本当にそうなのであろうか。障がいがあることによってできない事ばかり注目してしまい、できることに対して目を向けようとしなくなっているのではないかとこの活動を通じて思うようになった。三浦雄一郎はどんな困難な状況でも「できない理由よりもできる理由を考えろ」という。エベレストからの直滑降、80歳のエベレスト登頂など、おそらくできない理由を考えたら100では足りないくらいのことをやってのけた。それは困難な状況でもその場で失った事や、できないことの数数を数えていたのではなく、出来ることに集中し可能性を広げてきたからだ。

確かに、中岡さんは進行性の難病のため全身に力が入らない、杉田さんや父は脊髄損傷のために全身に麻痺があり歩行は困難だ。しかし、彼らが誰よりも優れていたのは目標を失わず、全員に声を掛け人々に勇気を与えて道を示したことだ。

当然、障がいがある人一人で山には登ることができない、しかし困難な山であれば一人で登れないの

は何も障がいがある人に限ったことではない。エベレストのような山ではパートナーやチームを組みながら一丸となって山頂を目指す。そこには誰が誰をサポートするのではなく、一つのチームとして力を合わせて困難に立ち向かうのだ。もし険しい崖があったら登るためにロープを準備す



写真③2023年 8 月 三浦雄一郎とその仲間達総勢70人が富士山山頂に立った様子

るだろう、では歩くことが困難であればヒップが準備するのと何が違うのだろう。困難に対して無理だと決めつけるのではなくどうやってそれを克服していくのかを考えるという意味では登山もインクルーシブ野外活動の思考体系はとても似ていると思う。

インクルーシブの反対語はエクスクルーシブである。条件をつけて特定の人を排除することによって囲われた一部の人が特別感を味わう、これが限定的なサービスであれば経済的活動の一部とみなせる。しかし、私たち社会全体が一部をエクスクルード（エクスクルーシブの動詞）することによって特別感を感じているとしたら、それこそが大きな意識的なバリアと言えるのではないか、そしてそれこそが私達が抱える社会の最も大きな障壁となっている。



写真④三浦雄一郎をヒップに乗せて富士山に挑んでいる様子

インクルーシブについて

三浦雄一郎、中岡亜希さん、杉田秀之さんは富士登山においてただ引っ張ってもらったのではない。

彼らは登山で最も重要な役割があった、それは「隊長」である。

登山隊長には色々なスタイルがある。自らが先頭を行き道を切り開く隊長も入れば、後方で指示を出しながら的確に頂上に隊をすすめる人もいる。しかし隊長の最も重要な役割は隊全体に対して責任を持ち、隊の精神的支柱であり、隊を山頂に導く意思そのものである。そこには極論を言うとは技術や体力の優劣は関係がない。

三浦雄一郎が70歳、75歳、80歳でエベレストに登れたのは他の隊員よりも体力や技術が優れていたのではなく、そうしたメンバーと共に支え、支えられながら山頂を目指したことにある。そう言った意味で中岡氏、杉田氏、三浦氏は申し分のない隊長だと思っている。彼らは隊に対して責任を持ち、声を掛け富士山の山頂に行く意思を最後まで見せたからである。

また、ロープを牽引している彼らも、誰一人として「引っ張ってあげている」といった気持ちは皆無であった。声を掛け合いながら、時にはお互いに冗談や悪態をつきながら心から楽しそうに富士山に登ることを楽しんでいた。それぞれが過去から現在までつながっていて、お互いにロープにつながっている以上に想いもつながっている人達である。そこには冒険の共有という特別な空間が生まれ山頂に着いた時には全員でその喜びを分かちあった。インクルーシブの意義は単に一緒にやるだけではなく、それぞれが役割を全うし、それぞれが関わりながら一つの目標に向かうことにある。

そして蛇足かもしれないが、こうしたヒップという野外適応機材があるからといって全ての障がいがある人が富士山に登ろうと言っているわけでもない。HIPPOは乗ってみればわかるが決して山道を長時間のって気持ちのいいものではない。ましてや自然環

2. 登山界の現状と課題

境の中で普段では考えられないような寒さ、暑さ、虫刺され、日焼けなどのストレスがある。ヒッポにのって登山を始めようと思ったら最初に優先されるべきはそこに乗る人の意志である。

それを、自分達が技術を得たのでそれを見せるために、当人の気持ちがないまま困難な山に向かってしまうと、そのことによって、自然が怖くなったり事故が起きたりしたら本末転倒である。インクルーシブ野外活動基本はみんなが関わり合いながら行うことである。最初は近くの公園でもいい、小さな丘でもいい普段家にいるのなら外に出るだけでも気持ちがいいだろう。こうして興味を引き出し次につながるように計画をするといいだろう。



写真⑤今回三浦雄一郎が富士山を登るのにあたり使用した野外適応機材「HIPPO CAMPE」

最後に

1970年、三浦雄一郎がパラシュートを背負いエベレストのサウスコルから直下降を行った。これによって三浦雄一郎は長編ドキュメンタリー部門でアカデミー賞に輝いた。実はそれ以外にもフランスの冒険映画祭でこの映像は大賞をとった。この時、海外の記者から次のような言葉をもらった。

「あなたの冒険は登山史の三ページ目を開くものでした。一ページ目はエドワード・ウィンパーが

マッターホルンへ登り、あれほどとがった山でも人間が登れるんだと証明したこと。二ページ目を開いたのはエドモンド・ヒラリーとテンジン・ノルゲイで、彼らは人類史上初めてエベレストの頂上に立ち、ヒマラヤ登山ブームの先鞭をつけた。そしてあなたは、突然あのエベレストにスキー板を持ち込み、パラシュートを開いて滑り降りてきた。それを機に、エクストリームや無酸素登山といった、新しい形の冒険登山がはじまったのです」

この後、世界の七大陸全てでスキー滑走を成功させた三浦雄一郎は日本だけではなく、日本を代表する世界的な冒険スキーヤーとして知られることになった。

しかし、3年前の頸椎硬膜外血腫によって全身に麻痺が生じて介護度4の認定を受けた三浦雄一郎だった。実際、間近に見ていた私も歩けなくなった父をみて「もう冒険は終わりだ」と思っていた。しかしそれでも父は夢を諦めずリハビリを続け目標を定め一歩ずつそれらをこなしていった。

こうして病気の発症から現在にいたるまで見ていた私にとって富士山に挑戦できるまでになったのは正直奇跡的なことである。しかし父の全盛期を知りながら、久しくその姿を見なかった人たちが車椅子で富士山に登った父のその姿に驚きやショックを受けたであろう。そして車椅子を使い大勢のサポートを受けての富士登山は大きな反響と共にそれ以上の批判も受けた。

しかし父がこの挑戦を行ったのは記録のためではない。新たな可能性を示すためだ。「あの三浦雄一郎が」、ではなく「あの三浦雄一郎でも」車椅子を使って富士山に登る。これにより、これまで障がいを理由に夢を諦めていた人たちに諦めない選択技があるということを示したことだ。これはとても勇気のいることである。

そしてこうした冒険には先駆者がいた。中岡亜希さん、杉田秀之さん達も自分を諦めず仲間と共に富士山を目指した。これまで数多くの冒険のページを自ら開いてきた三浦雄一郎であるが、これからはそのページを開くのは三浦雄一郎一人ではない。社会に不自由を感じているすべての人と一緒に開くべきページだ。その問いかけは登山だけには留まらず社会のあらゆる分野に波及することではないかと思う。この投稿が近い将来本当の意味でインクルーシブな社会になるその一助となれば幸いだ。

引用

- ① 『障がいのある方の運動・スポーツ活動に関する調査』、長野県健康福祉部・信州大学（加藤彩乃）合同調査（2017）
- ② 内閣府ホームページ、“障害を理由とする差別の解消の推進に関する法律”、内閣府ホームページ，2024/01/01 01:03:25 (JST)，https://www8.cao.go.jp/shougai/suishin/law_h25-65.html，（参照2024/01/07）
- ③ 政府広報オンライン、“知ってますか？街の中のバリアフリーと「心のバリアフリー」”、2024/01/01 01:01:20 (JST)、<https://www.gov-online.go.jp/useful/article/201812/1.html#firstSection>、（参照2024/01/07）
- ④ 小泉二郎，インクルーシブ野外教育研究所，インクルーシブ野外活動指導員講座テキスト，2017
- ⑤ 文部科学省ホームページ、“令和4年度特別支援教育に関する調査結果について”、文部科学省「令和4～5年度特別支援教育に関する調査の結果について」、2023/12/01 01:02:09 (JST)、https://www.mext.go.jp/content/20231031-mxt_tokubetu02-000032436-3r.pdf，（参照2023/01/07）
- ⑥ UNESCO，“The Salamanca Statement and Framework for Action on Special Needs Education”，<https://unesdoc.unesco.org/ark:/48223/pf0000098427>，June 1994，（参照2024年01月07日）
- ⑦ 障害者権利条約を批准して改定された学習指導要領
文部科学省ホームページ、“障害者の権利に関する条約について”、2023/12/01 01:02:09 (JST)、https://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chousa/shotou/054/shiryo/08081901/008.htm，（参照2024年1月7日）